

## 大学生の大学滞在時間：4 時点（1996 年・2001 年・2006 年・2011 年）の比較から

著者	浜島 幸司
雑誌名	The Basis：武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	4
ページ	99-113
発行年	2014-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000132/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000132/</a>

# 大学生の大学滞在時間

— 4 時点 (1996 年・2001 年・2006 年・2011 年) の比較から—

浜島 幸司

## 1. はじめに

「最近の学生が、真面目化、大人に従順化していることは、様々なデータに表れている」(武内、2013: 38) という。それは、とりわけ授業への出席および受講態度であり、大学生を調査したデータから、授業満足度の高さ読み取ることができる(武内(研究体表)、2005)(同、2007)(同、2009)(同、2010)。また、授業に限らず、「教員、職員、そして大学全体の満足度も高くなっている」(武内、2013: 38)。

それでは、以前の大学生はどのような生活を送っていたのだろうか。図1は、1980年代前半の私立大生が自らの生活をモデル(武蔵太郎君)にして執筆した調査報告書の一部である。図のイラストを読めると、武蔵太郎君は午前10時に起き、10時30分からの講義に遅刻寸前で間に合う。昼食を大学でとり、休憩後、午後2時には学外の雀荘に行ってしまう。その後、家でくつろぎ、午前0時には就寝するという一日である。



(武内、2013: 37)

図1 武蔵太郎君の一日(1980年代前半の大学生生活)

(補足) 原典は、武蔵大学社会科学部『現代大学生の受講態度とその関連要員の研究』1985年。

このイラストをみる限り、武蔵太郎君は机に座っての「勉強」らしいことは、ほとんどしていない。講義に1コマ出席しているが、昼寝をしている。午後は本来ならば、2コマ履修しているようだが、1コマは休講で、もう1コマは出席しない。大学に滞在している時間は、午前10時30分から午後2時と仮定してみると、3時間30分ほどとなる。もちろん、これは「モデル」と認識しておく必要はある。とはいえ、当時の大学生の様子をうかがい知ることができる。

1970年代後半から1980年代前半にかけての大学生は、「学び」というよりは、「遊び（余暇を含む）」を中心にした生活を送っている。「遊び」は学外（大学周辺の街や自宅アパート）でおこなう。このように、彼らは小・中・高校と「学校」を中心とした生活とは異なる、いってみれば「自由な」大学生生活を送っていた。「学生たちは、大学の授業にはあまり出席せず（三割の出席があればいい方だった）、サークル活動やコンパ、交友、合コンに、大学生活が明け暮れていた」（武内、2013：36）のである。

## 2. 先行研究と問題関心

大学生が、一日をどこで、どのように過ごすかというのは、彼らが所属する空間の独自の文化を探るうえでも重要な視点である。

そもそも、時間とは万人に共有された単位であり、比較可能な指標である。われわれにとって、時間と関係のない生活を送ることはもはや難しいといえるほど、社会に内在している。ある社会的行為や現象を理解するためにも、「いつ」「どこで」「誰が」「どうして」「どのように」「どのくらい」時間に関わったのかを明らかにすることは、貴重なデータとなる。たとえば学習時間について、荻谷は「見方によっては多様な社会的含意をもつ」（荻谷、2000：214）といい、高校生の努力の指標として分析した。データから理論化の展開を目論んだ先行研究といえる。

すでに大学生の固有の生活時間については、多くの研究がなされている。たとえば、全国大学生生活協同組合が1963年より毎年、「学生生活実態調査」をおこなっている。本データを参照した岩田（2010：15）は、「読書時間」の経年比較をおこない、1971年から2009年に至るまでの読書時間の減少を「読書離れ」として、指摘した。

また、勉強（学習）時間についても、谷村（2011）は、学習時間と学習成果の関係を東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが2006年から2007年にかけて実施した「全国大学生調査」のデータから分析している<sup>1)</sup>。「サークル」「アルバイト」についても、岩田・北條・浜島（2001）では、3つの大学で実施した調査データをもとに、使用時間を分析している。大学の授業が最も多い日（最多日）と最も少ない日（最少日）の使用時間を比較検討した。

一方で、大学内での固有の活動時間をすべて足し合わせた、大学に滞在する時間について、調査および報告した研究は多くはない。先に示した「学生生活実態調査」では、実施した年度の報告書に集計という形で掲載されている（全国大学生生活協同組合連合会、2013）<sup>2)</sup>。

ほかの調査では、Benesse 教育研究開発センター（2013）、および岩田・北條・浜島（2001）

による簡単な結果報告がなされている。

今回、本稿で大学滞在時間を取り上げる理由は、以下の2点である。

1点目は、大学生が所属する「キャンパス」にどのくらい居るのか、具体的な数値として実態を把握し、報告するためである。冒頭で示した、武蔵太郎君は学外の「遊び」の場でキャンパスライフを謳歌している。片や、最近の大学生は学業中心の「学び」に打ち込んでいる。この点を、大学滞在時間という指標から確認もしくは検討の材料として提示する。

2点目は、大学という場の在り方を再検証するための指標を用意することにある。小・中および高校は、「生徒」を教育する学びの場である。大人とはみなされない「児童もしくは生徒」と呼ばれる彼らを、大人（教員）もしくは国家レベルで計画的に、彼らの成長のために必要とされる知識を教える。次世代の社会人とすべく、社会化を組織的におこなっている。そのためにも、多くの時間を学校の中で過ごし、固有の規律を示し、生活に適応させていく。学校が社会に出る前の訓練機関と化している、この「学校化」<sup>3)</sup>は上記の学校段階でおこなわれているのはいうまでもないことなのだが、果たして、大学という高等教育機関でも同様のことが起こっているのだろうか。「大学の『学校化』」<sup>4)</sup>については、確証できるデータが乏しいため未だ印象論の域を出ない。

以上より、大学滞在時間について、データを示し、現状を確認していく。その際、属性による差異がみられるかどうかについても注目し、特徴の有無を確認する。現状の確認後、以前の状況と差異がみられるのか、比較検討する。

最後に、この大学滞在時間が意味するもの、今後どのような議論ができるのか、考察する。

### 3. 使用データ

使用する調査データは、全国大学生生活協同組合連合会（Univ.co-op）が実施している「学生生活実態調査」の個票データを使用する（大学院生の回答は除く）。大学生協のある全国の大学から相当数の学生回答を得ており、学生生活の実態を知るうえで有効である。ただし、大学生協が存在する大学は、国公立および設立年数の古い私立大学に偏る傾向がある。分析結果をみる際には、大学入学ランクとして中より上に位置する大学生のものであると留意したい。

本調査は、1963年（第1回）から毎年実施しており、今回分析で使用するデータは、「1996年（第32回）」、「2001年（第37回）」、「2006年（第42回）」、「2011年（第47回）」の4回分とした。調査時期は、各回とも10～11月である。この4回の調査には、大学滞在時間を算出する項目が用意されている。また、大学の大衆化、大学生の学力低下<sup>5)</sup>の議論が開始した1990年代後半時点からの比較をおこなうことができる。

今回は、1996年から5年間隔で2011年までの15年間の大学滞在時間の変化をみていく。分析サンプルは、「1996年」は16,564名、「2001年」は12,788名、「2006年」は18,204名、「2011年」は16,885名である。

大学滞在時間については、各回の調査票で調査を実施した当日の「登校（大学に到着した）時刻」と「下校（大学を出た）時刻」をたずねている。そこで、「下校時刻－登校時刻」

として、時間ではなく分に換算・集計した。全体、属性別分析は、平均値を用いる。

## 4. 結 果

### 4.1. 2011 年の大学滞在時間

2011 年の大学生の大学滞在時間の平均は、455.9 分（7 時間 36 分）である（表 1）。

仮に、8 時 30 分に大学に着いたとした場合、滞在後、16 時 05 分に大学を出るということになる。学生たちは平日の午前と午後の間、学内にいる生活を送っていることになる。その意味で、小中高までの学校生活と大差ない、学生たちにとっても大学も一つの「学校」であるともいえる結果である（浜島・谷田川、2012：55）。

設置形態別では、国立大学の学生の滞在時間が、公立・私立大学に比べて長い。

学部別では、医歯薬系の学生が 8 時間 12 分となっている。次いで、理科系、文科系と続く。医歯薬系と文科系とでは 1 時間 3 分の差異がみられる。

学年別では、学年が低い順（1 年生→2 年生→3 年生→4 年生以上）ほど、滞在時間が長い。

学生生活の充実度という意識項目別にみると「充実している」学生（7 時間 58 分）のほうが、「充実していない」学生（7 時間 3 分）よりも長く大学に滞在している。

このように、2011 年の全体および属性別の大学滞在時間が明らかになった。

表 1 2011 年の大学滞在時間

		平均時間		
全体		7	時間	35 分
設置形態別	国立	7	時間	46 分
	公立	7	時間	32 分
	私立	7	時間	21 分
学部別	文科系	7	時間	9 分
	理科系	7	時間	51 分
	医歯薬系	8	時間	12 分
学年別	1年	8	時間	3 分
	2年	7	時間	40 分
	3年	7	時間	15 分
	4年以上	7	時間	12 分
学生生活の充実度	充実している	7	時間	58 分
	充実していない	7	時間	3 分

「分」を時間換算にしている

（浜島・谷田川、2012：55）

### 4.2. 大学滞在時間の推移：全体と属性

それでは、この大学滞在時間は年々増えてきているのだろうか。4 回の全体の平均値が図 2 である。全体の大学滞在時間の平均をみると、1996 年は 405.7 分（6 時間 45 分）、2001

年は422.3分（7時間2分）、2006年は450.9分（7時間30分）、2011年は455.9分（7時間35分）である。この15年間でおよそ50分間、一日の大学滞在時間が増えている。2001年から2006年の2時点で、28分間の増加がみられる。

図は略したが、男女別では大きな差異はないが、2006年より女子学生に比べ、男子学生の滞在時間が増えている。

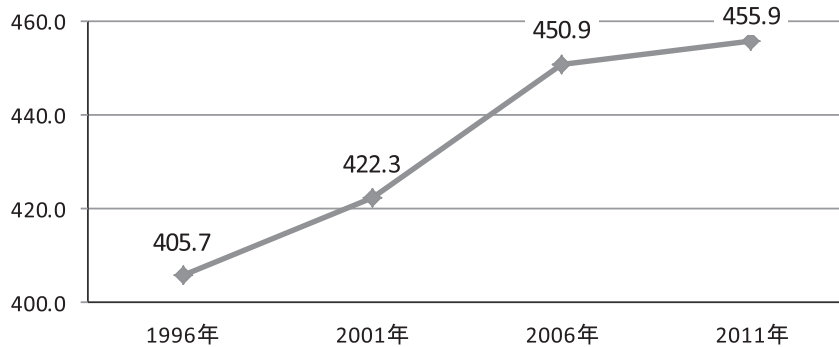


図2 大学滞在時間の推移 全体（単位：分）

所属学部別（学系）の平均をみると、いずれの回であっても、滞在時間は、医歯薬系＞理科系＞文科系の順番に長くなっている（図3）。また、1996年から2011年の増加をみると、医歯薬系で45.5分、理科系で35.4分、文科系で51.2分となっている。3つの所属専攻学部のうちで、文科系の大学生の滞在時間が増えている。

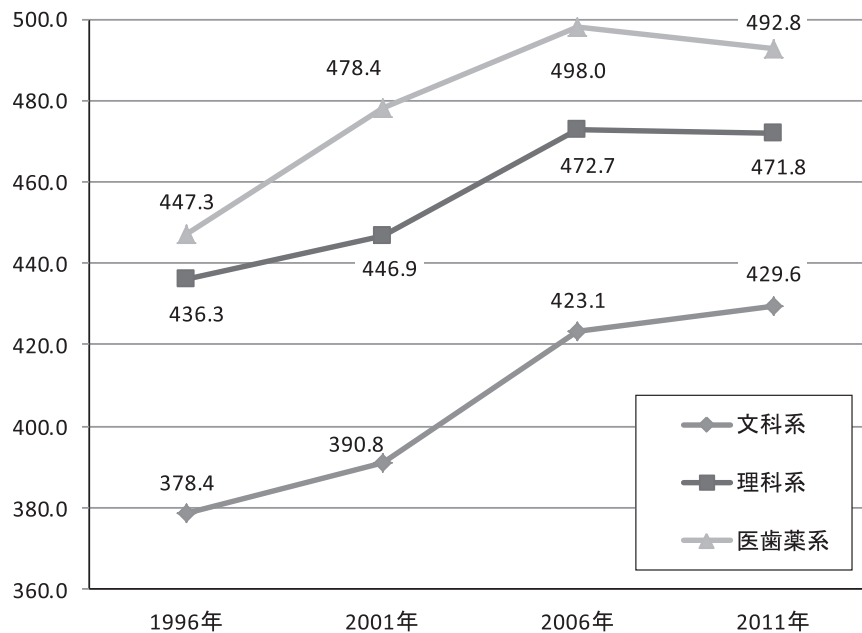


図3 大学滞在時間の推移 学部別（単位：分）

図4は、学年別に平均をみたものである。2001年以外の3回では、滞在時間は、1年生＞2年生＞3年生＞4年生以上の順番に長くなっている。

また、1996年以降、すべての学年の滞在時間が増えている。2011年までの増加をみると、1年生で53.4分、2年生で53.9分、3年生で37.2分、4年生以上で52.0分となっている。2006年と2011年をみると、2年生以上の増加の幅が低くなっているが、1年生は10.6分ほど増加している。

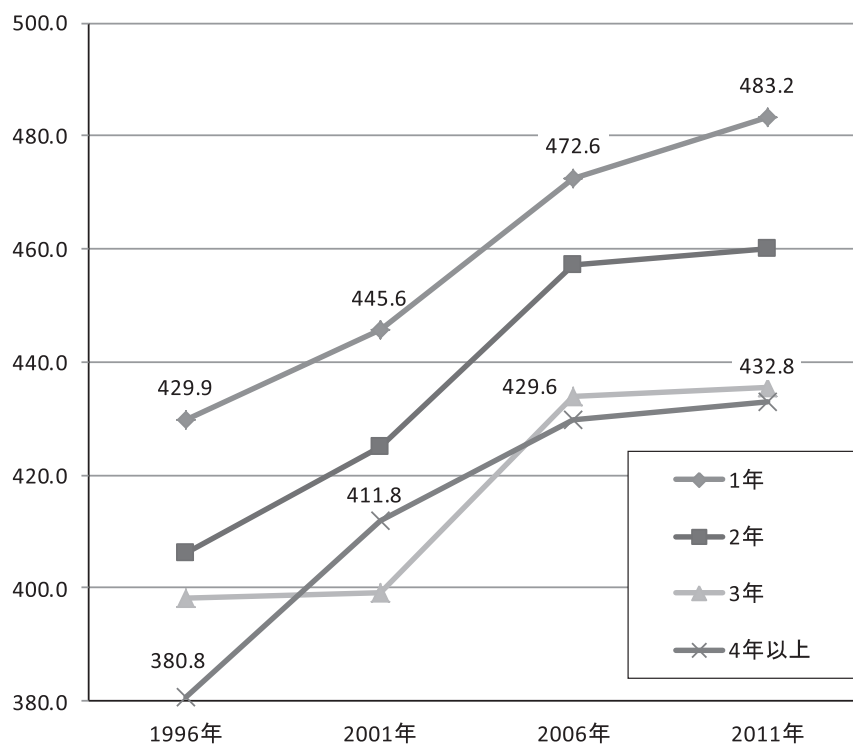


図4 大学滞在時間の推移 学年別（単位：分）

図5は、設置形態別に平均をみたものである。国立大学と公立大学は「国公立」として同じカテゴリーに含めた。図より、どの時点でも国公立大学のほうが、私立大学よりも大学滞在時間が長い。2001年に内部差はいったん縮まったが、20分ほどの開きがある。

図6は、通学形態別に平均をみたものである。自宅通学者と自宅外（アパート、下宿、寮など）の2つのカテゴリーに分け、比較した。2001年を除いて、自宅外の学生のほうが、自宅生よりも大学滞在時間が長い。大学滞在時間は、通学形態よりも、通学距離（通学時間）のほうが影響を受けると考えられる。自宅外で通学距離が短い学生が大学に長く居ると想定したのだが、全体の平均を算出してみると、それほど内部差が大きいというほどではない<sup>6)</sup>。

以上より、2011年の大学生は、1日の三分の一近くを大学で過ごしている。医歯薬系学部、国公立、1年生、男性、自宅外通学といった属性の学生が、大学に長く滞在している。また、1996年以降の4時点を比較した結果、昨今の大学生は以前と比べて、大学に長く居ることが確認された。



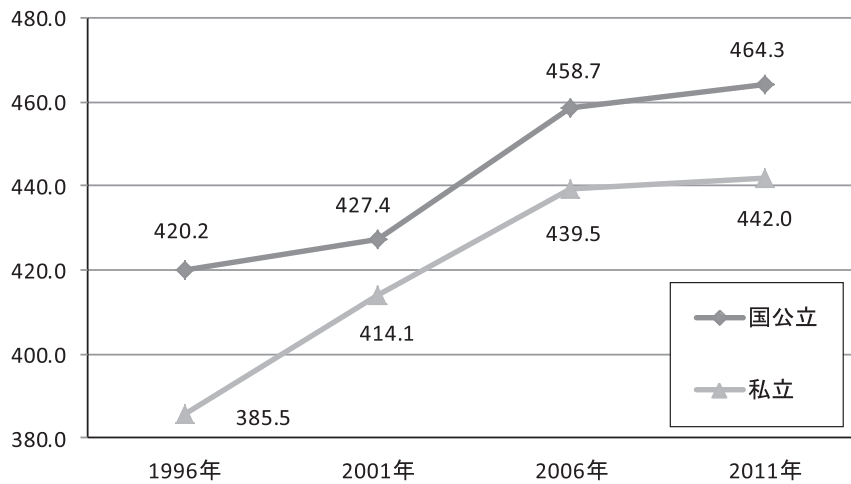


図5 大学滞在時間の推移 設置形態別 (単位: 分)

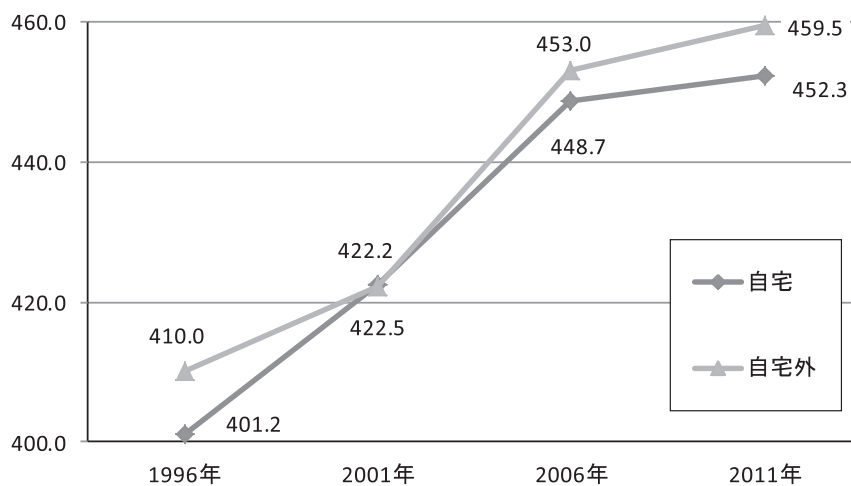


図6 大学滞在時間の推移 通学形態別 (単位: 分)

#### 4.3. 大学生生活の重点・授業履修コマ数・大学生生活充実度と大学滞在時間の関係

属性以外にも、ほかの変数を用いて、大学滞在時間との関係をみていこう。

図7は、大学生生活の重点を置いている項目別に平均をみたものである。4時点にわたって、大学滞在時間が長い項目は「勉強や研究を第一に置いた生活」である。次に、「サークル・同好会の活動を第一に置いた生活」である。大学に活動拠点があることは、滞在時間を長くなることと関係があるといえよう。



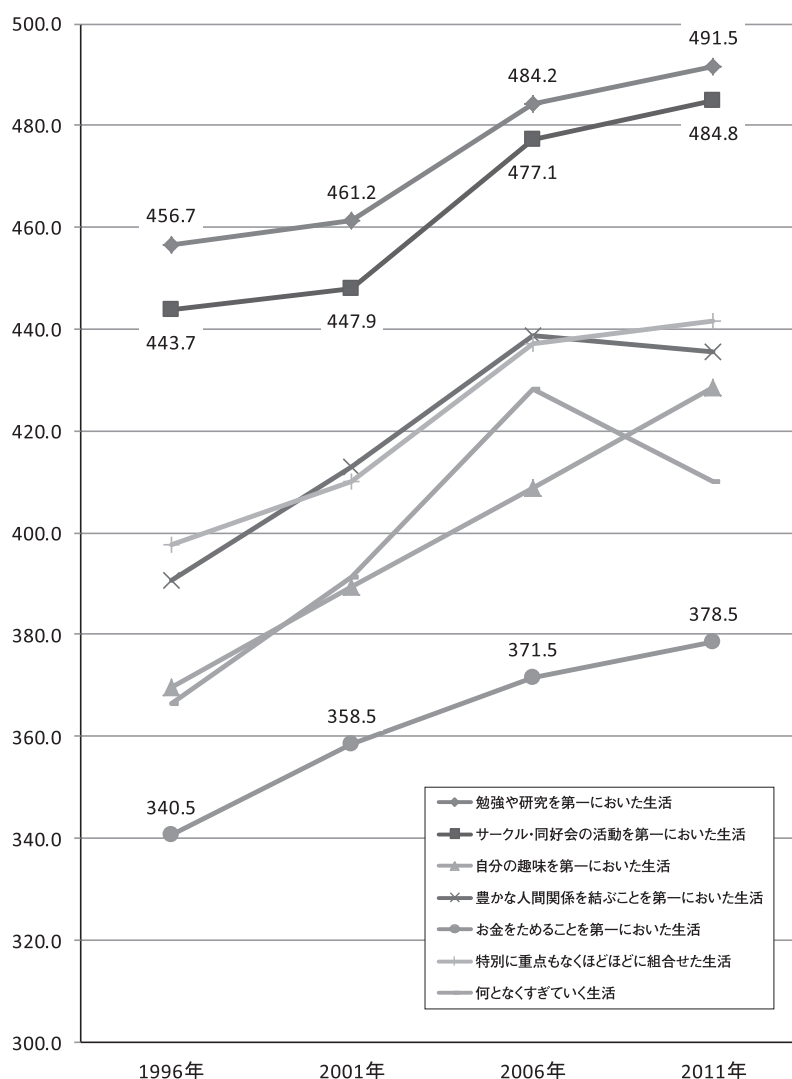


図7 大学滞在時間の推移 大学生生活の重点別（単位：分）

図8は、当日出席した授業コマ数別に平均をみたものである。調査年の平均出席授業コマ数は図中（ ）内に示した。総じて、出席授業コマ数が多くなるほど、大学滞在時間が増える。0コマ（授業に出席していない）の学生は、3コマの学生と同じぐらいの滞在時間である。また、1コマから3コマの出席者が、2001年以降、滞在時間が増えてきている。

授業に出ている時間を除いて、どのくらい滞在しているのか、再集計したものが図9である。出席授業コマが少ないほど、授業以外で大学に長く滞在していることがわかる。逆にいえば、出席コマが多い学生は、授業がメインでそれ以外の活動に時間を費やさない生活を送っている。2011年に1コマ出席した学生は、学内に授業以外で233.8分（3時間53分）滞在している。武蔵太郎君は、昼食を食べたら学外に行ってしまった。しかし、今や授業以外で4時間過ごす学生がいる。この中身に迫ることは、今後の課題としたい。

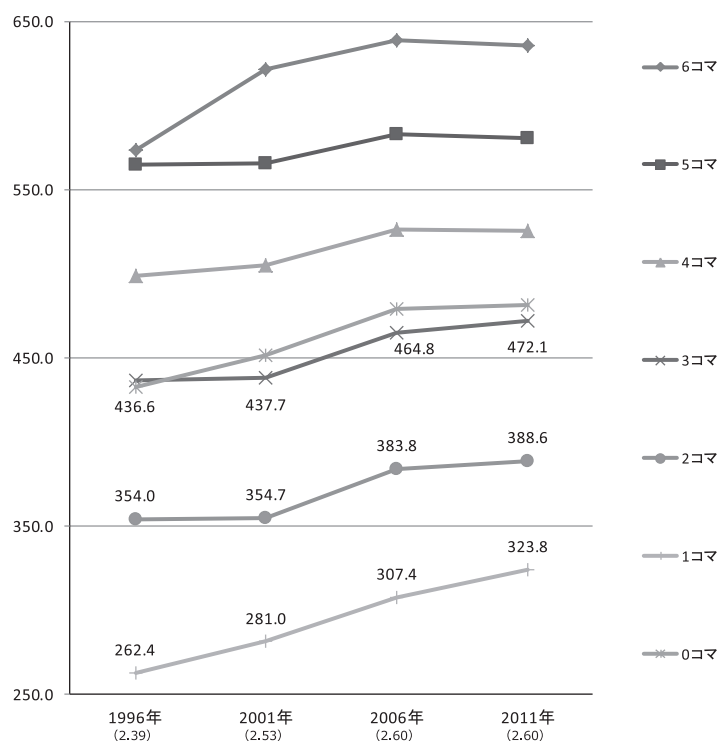


図8 大学滞在時間の推移 授業出席コマ別（単位：分）

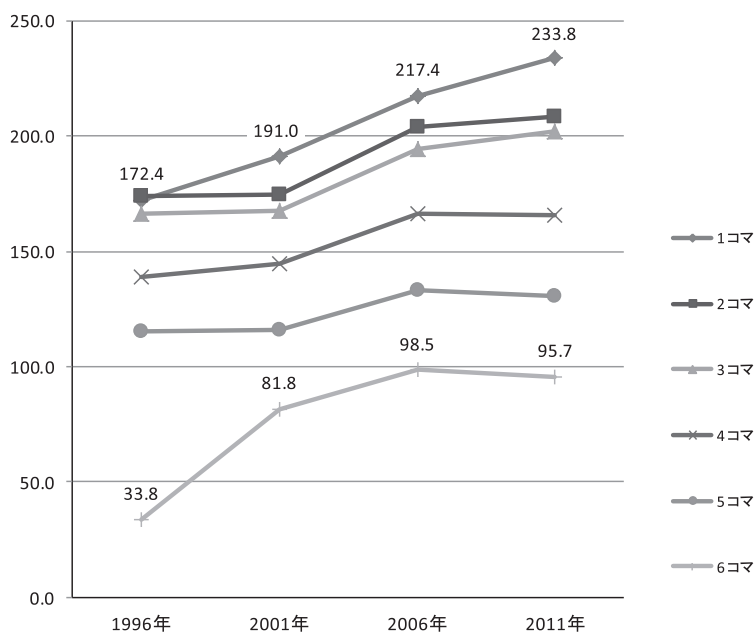


図9 大学滞在時間の推移 授業出席コマ別（単位：分）

図8 から出席授業コマ分の時間を引いた値を図示

図 10 は、学生意識別に平均をみたものである。ここでは「学生生活の充実度」を使用した<sup>7)</sup>。どの調査年でも、充実している学生は、そうでない学生に比べて、大学滞在時間が長い。しかし、気になるのは、2001 年と 2006 年の間に「充実していない（「あまり充実していない」も含む）」学生も大幅に、滞在時間が増えていることだ。大学生活に手ごたえを感じていないにもかかわらず、充実している層と比例して、大学に居るようになっていく。このように内部格差が広がることなく、2011 年に至るまで大学滞在時間が延びている。

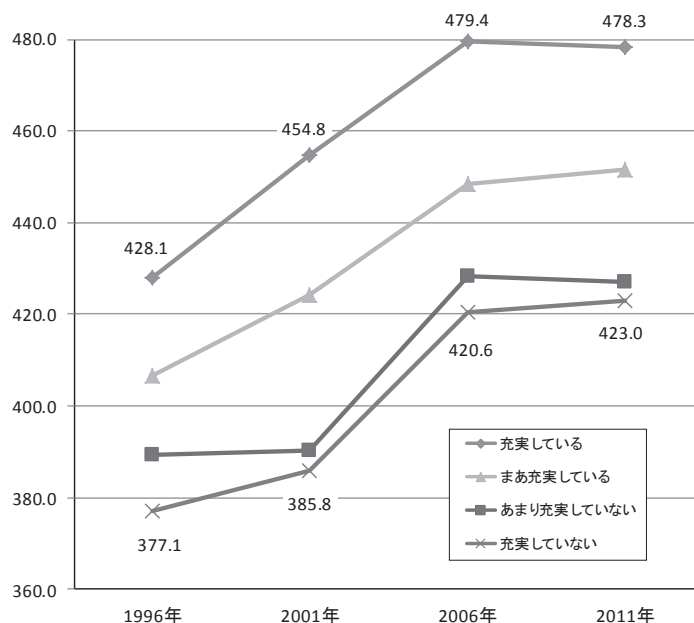


図 10 大学滞在時間の推移 大学生生活充実度別（単位：分）

このように、意識の側面からも大学滞在時間に差異があることがわかった。また、大学滞在時間は、授業出席コマ数と大きく関わっていることもわかった。あわせて、出席コマ数が少ない学生ほど、授業以外の活動で大学に滞在していることもわかった。

#### 4.4. 大学滞在時間を規定する要因（重回帰分析）

それでは、大学滞在時間を規定する要因はどのようなものなのか。今まで、属性および意識項目をひとつずつ、大学滞在時間の平均値と比較してみたが、背後に他の変数の影響も否定できない<sup>8)</sup>。

そこで先にみてきた属性および意識項目が、従属変数である大学滞在時間に与える効果を探るため、モデルを設定し、実際に独立変数として同時に投入する重回帰分析をおこなう。重回帰分析によって、独立変数が有意な効果をどのくらいもっているかを確認することができる。しかも、投入した独立変数が他の変数の影響をうけずに統制しているため、従属変数に与える個々の独立変数の直接的な効果を確認することができる。

分析モデルは 2 つ用意した。1 つは、調査時点の効果を探るべく、4 つの調査で用いた

データを一元化して、調査時点の効果を探るモデルである。もう1つは、4つの調査をそれぞれ分け、その中での独立変数が与える効果を比較するモデルである。この分析によって、調査年によって、どの独立変数の効果が高かったのか、4つの調査結果から比較することができる。

投入した属率変数は、調査年、性別、設置形態、学部、通学形態、学年、授業出席コマ数、大学生生活の充実度の項目である。その分析結果を表2に示した。

表2 大学滞在時間の規定要因 4つの調査統合・調査年度別

【独立変数】	【従属変数】大学滞在時間				
	1996-2011	1996年	2001年	2006年	2011年
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
(定数)	**	**	**	**	**
調査年(参照 1996年)					
(2001年=1)	.015 **	—	—	—	—
(2006年=1)	.092 **				
(2011年=1)	.090 **				
性別(男=1 女=0)	.005	.003	-.005	.005	.018 *
設置形態(国公立=1 私立=0)	.042 **	.047 **	.008	.026 **	.076 **
学部(参照 文科系)					
(理科系=1)	.141 **	.143 **	.158 **	.151 **	.123 **
(医歯薬系=1)	.059 **	.019 *	.062 **	.079 **	.071 **
現在の住まい(自宅=1 自宅以外=0)	-.006	.001	.011	-.017 *	-.010
学年(1~4年以上)	.046 **	.039 **	.061 **	.047 **	.044 **
授業に出たコマ数(0~8)	.367 **	.389 **	.384 **	.364 **	.350 **
大学生生活の充実度(1~4)	.109 **	.103 **	.131 **	.108 **	.105 **
F 値	1189.068 **	432.462 **	328.509 **	399.660 **	333.801 **
調整済み R <sup>2</sup> 乗	.177	.182	.180	.157	.141
N	60736	15508	11900	17113	16215

\* p<0.05 \*\* p<0.01

まず、4つの調査データを統合(表内の「1996-2011」の列)して、時点の効果を検討したところ、1996年に比べて、2001年、2006年、2011年に有意な効果があることがわかった。つまり、1996年以降、大学滞在時間が増えていることが確認された。時点の効果以外に、このモデルにおいて、有意な効果があった項目は、規定力が高い順に「授業出席コマ数」、「文科系と比べて理科系学部」、「大学生生活充実度」、「文科系と比べて医歯薬系学部」、「学年」、「国公立大学」となっている。学年については、学年が上がるごとに、大学滞在時間が増えるという結果である。図4では学年が低いほど、大学滞在時間が長かったが、本モデルのように独立変数を投入した場合、効果が逆になる。平均値の比較をした際には、隠された別の変数の影響があったものと推察される。

次に、4つの調査データに対し、同じ独立変数を投入して重回帰分析をおこなった結果、4時点それぞれにおいて、「授業出席コマ」の効果が高いことがわかった。次いで、「文科系に比べて理科系学部」、「大学生生活の充実度」、「文科系に比べて医歯薬系学部」、「学年」の効果が確認された。「国公立」の効果は、2001年ではみられなくなっている。「男性」の効果は2011年のみでみられる。「自宅外」の効果は2006年のみでみられる。

大学は、やはり授業への出席が中心になっている。履修した授業への出席は当然のことと

なり、休まずに出る。理系の学生は、所属の研究室での実験およびその準備や後片付け等の理由で、大学にいる時間が多い。実験のための環境および設備が大学にあるということが在学時間を長くさせているように思われる。医歯薬系の学生も同様であろう。大学生活に充実している学生は、学内での人間（交友）関係を中心とした活動拠点を築いており、大学から外へ出なくとも困らない（わざわざ外へ出る必要がない）のだろう。学年の効果は、在学が長くなり、学内生活への適応が進んだ結果である。学内環境を知り、居場所をみつけ、自分にあった居心地のよい時間を過ごすことができる。

この2つのモデルの分析結果より、「授業出席コマ数」が多いほど、また「文科系に比べて理科系学部」であることで、大学滞在時間は強く規定されることがわかった。

## 5. まとめと考察

今までの分析をまとめよう。①1996年以降、大学生の大学滞在時間の平均は6時間45分から7時間35分へと50分ほど、長くなってきている。②属性別にみていくと、内部差のあるものが多数あるが、そもそも1996年時点で差異が存在しており、そのまま全体的に伸びているという傾向がみられる。③独立変数として、同時に複数の属性および意識項目を投入した重回帰分析をおこなったところ、4つの調査年において、出席する授業のコマ数の規定力が最も高いことがわかった。④また、時点（調査年）による効果もあることがわかった。

それでは、なぜこの15年で大学生たちの大学滞在時間が長くなったのだろうか。言い換えれば、大学の「学校化」が進んだ背景の一つには、社会構造の変化があったといえる。ここでは、1990年代後半からの大学改革、高等教育政策の流れを示す。表3は、1998年から2005年までの主な政策、審議会答申を示したものである。この時期に国家は、大学・大学生に注目し、従来の在り方を変えるべく動き出した。

表3 1998年から2005年までの大学改革、高等教育政策の流れ

1998年	「21世紀の大学像と今後の改革方策について（答申）」大学審議会
2000年頃	初年次教育（現在の定義よりも広範囲な取り組みとして）始まる
2000年	「大学における学生生活の充実方策について」（広中レポート）
2001年	「大学（国立大学）の構造改革の方針」（遠山プラン）
2003年	GP（Good Practice）事業の開始
2004年	国立大学が独立行政法人へ／認証評価制度の開始
2005年	「我が国の高等教育の将来像（答申）」中央教育審議会

いうまでもないことだが、この時期は大学進学率の上昇および18歳人口の減少がある。多くの私立短期大学は4年制大学へと改組し、大学の生き残りが叫ばれるようになった。同じくして、長引く不況もあり、大学卒業後の就職への不安が高まっている。

もはや武蔵太郎君のように大学生活で「遊び」を謳歌する余裕はない。在学中に、「勉強」を中心に修めるべき知識を獲得し、社会で活躍する人材となることが、社会的にも、そして学生自身に対しても求められるようになった。

新入生は、専門学部にも所属し、学部が用意する科目を履修していく。卒業までに段階を追って、単位（学び）を積み上げていく。教員による指導が、学生にとっての意味ある知識となっていく。授業を中心とした大学生生活——その結果がこの15年間の大学滞在時間の延びになったといえないだろうか<sup>9)</sup>。

## 注

- 1) とりわけ、授業外の大学生の学習時間については、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」より、実際の学習時間と単位付与の考え方が合致していないことが指摘された。その後、各大学で実施する学生調査に学習時間の項目が盛り込まれるようになってきている。
- 2) 全国大学生生活協同組合連合会が毎年発行する調査報告書では、回収した全サンプルではなく、経年比較をおこなうために、調査大学を抽出したうえで、集計・公表をおこなっている。
- 3) 「学校化」社会に関する先行研究と概念整理については、張江・浜島（2006）が詳しい。
- 4) 「大学」の「学校化」とあわせて、大学生が「生徒化」（伊藤、1999）（浜島、2005）（新立、2010）しているのではないかという側面もある。ただし、「学校化」と「生徒化」については、必ずしも同一概念ではないため、慎重に議論する必要があると感じている。今回は「学校化」に焦点を絞る。
- 5) 『分数ができない大学生』（1999年）、『小数ができない大学生』（2000年）の出版などがあった。
- 6) 通学時間だけでなく、交通機関（電車・バス）および自転車、バイク、自家用車、徒歩の使用の有無との関係、大学の立地（街中にあるか・郊外の小高い丘にあるか）などの関係もあり、複数の組み合わせが考えられる。その意味で、通学形態で説明するのは難しい。
- 7) 4時点での大学生生活充実度に関する回答傾向は、図11のように、調査年を追うごとに「充実している」（「まあ充実している」も含む）が増加している。2011年では88.5%が「充実している」と回答している。

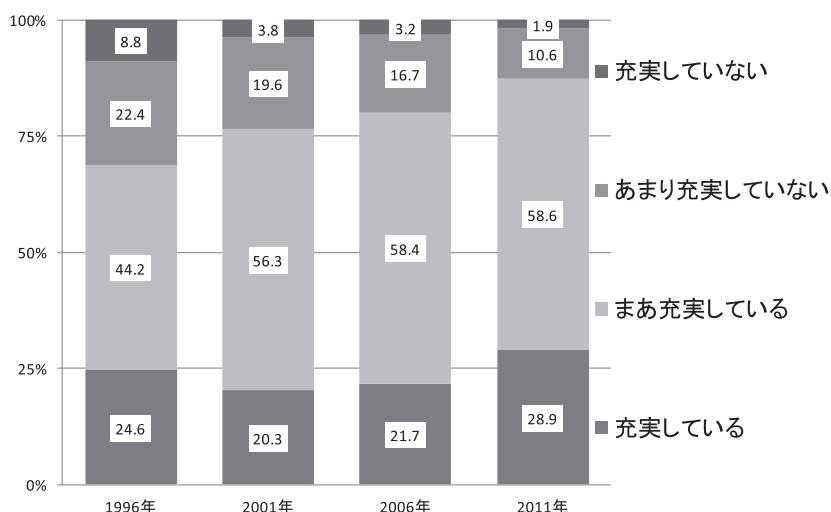


図11 大学生生活充実度の回答構成割合の推移（単位：％）

- 8) たとえば、見かけのうえでは性別の差異があったとしても、実は学年の影響の方が強く隠されている、といったようなこと。
- 9) 素材を挙げての推論であり、大学滞在時間と社会的要因（政策、経済情勢など）の検討は、より丁寧に検討されなければならない。引き続き、今後に向けての課題とする。

## 参考文献

- Benesse 研究開発センター, 2013, 『第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書』, 研究所報 vol.66, Benesse 研究開発センター.
- 浜島幸司・谷田川ルミ, 2012, 「大学生活の充実度の分析」全国大学生生活協同組合連合会, 『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像』, 全国大学生生活協同組合連合会, pp.48-66.
- 浜島幸司, 2005, 「大学生は『生徒』である。それが、何か?」, 『上智大学社会学論集』, 第29号, pp.191-208.
- 張江洋直・浜島幸司, 2006, 「大衆教育社会と〈自己実現の物語〉」, 『稚内北星学園大学紀要』, 第6号, pp.75-93.
- 伊藤茂樹, 1999, 「大学生は『生徒』なのか」, 『駒沢大学教育学研究論集』, 第15号, pp.85-111.
- 岩田弘三, 2010, 「設置者別にみた学生生活費と学生文化の推移—全国大学生生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』データをもとに—」, 『私学高等教育データブック2010 (私学高等教育研究叢書)』, 日本私立大学協会附置・私学高等教育研究所, 第1章, pp.11-42.
- 岩田弘三・北条英勝・浜島幸司, 2001, 「生活時間調査からみた大学生の生活と意識—3大学調査から—」, 『大学教育研究』, 第9号, 神戸大学 大学教育研究センター, pp.1-29.
- 荻谷剛彦, 2000, 「学習時間の研究—努力の不等とメリトクラシー—」, 『教育社会学研究』, 第66集, pp.213-230.
- 新立慶, 2010, 「大学生の『生徒化』論における批判的考察」, 『名古屋大学大学院 教育論叢』, 第53号, pp.67-75.
- 武内清 (研究代表), 2005, 『学生のキャンパスライフの実証的研究—21大学・学生調査の分析—』, 平成16~18年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 中間報告書.
- 武内清 (研究代表), 2007, 『現代大学生の生活と文化—学生支援に向けて—』, 平成16~18年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 最終報告書.
- 武内清 (研究代表), 2009, 『キャンパスライフと大学の教育力—14大学・学生調査の分析—』 (平成19~21年度文部科学省研究補助金報告書)。
- 武内清 (研究代表), 2010, 『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』, 平成19~21年度文部科学省研究補助金 (基盤研究 (B)) 最終報告書.
- 武内清, 2013, 「現代大学生論」, 『教育展望』, 2013年4月号 (第59巻3号), 教育調査研究所, pp.36-40.
- 谷村英洋, 2011, 「大学生の学習時間と学習成果」, 『大学経営政策研究』, 東京大学院教育研究科経営・政策コース, 第1号, pp.69-84.
- 全国大学生生活協同組合連合会, 2012, 『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像』全国大学生生活協同組合連合会.
- 全国大学生生活協同組合連合会, 2013, 『CAMPUS LIFE DATA 2012 (学生生活実態調査報告書)』全国大学生生活協同組合連合会.



【付記】 本稿は、2013 年 6 月 30 日に開催された第 20 回日本子ども社会学会大会（於：関西学院大学）での自由報告「大学生の『生徒化』をめぐって」の筆者の報告部分（共同報告者は武内清（敬愛大学特任教授））を大幅に加筆修正したものである。

本稿作成にあたり、武内先生の報告部分も参照させていただいた。参照箇所の掲載へのご了解と、本稿執筆に対するあたたかいご支援を武内先生よりいただいたことに、お礼を申し上げる。

調査データの使用にあたっては、全国大学生生活協同組合連合会の許可を得た。経年にわたって蓄積されている貴重な調査データを再分析する機会をいただけたことに、お礼を申し上げる。